



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

## 「三人の聖者 ラマナ・マハルシ②」

ルリ子ちゃんとわが輩はクラス・メイトであり、かつ美術研究会のクラブ・メイトでもある。しかし、あまり一緒に行動した記憶がない。クラスではわが輩は勉強熱心なマドンナ・グループにへばりついていた。クラブでは異色な五人組（モジリアニ・グループ）に属し、真面目にデッサンに励むルリ子ちゃんのグループとは疎遠であった。

他のグループの合宿に潜り込んだのは、ただ神津島に行ってみたくてという単純な理由であった。そこにたまたまルリ子ちゃんがいた。驚いたことにBも来ていた。ちなみにBはわれ等五人組の一人である。

われら二人は「客人」を自認し、絵を描くでもなく日がな一日海で泳ぎブラブラしていた。キャンプ・ファイヤーにも飽きたので、なんとなくルリ子ちゃんを散歩に誘っただけである。以上はわが輩の言い訳であろうか。読者諸氏よ。

寢床に入り目を閉じると、ルリ子ちゃんの影像が浮き上がってきた。

(本当はルリ子ちゃんのことを好きだったのではないか?)

影像を観ている「私」が反問した。

(そんなことはない。学友に恋愛感情を持ったことは一度もない)

(オマエがそう思いたいだけではないのか?)

(ちっぽけな恋愛感情で友情を壊したくないと思っていたよ)

(うそつけ!)

そこで心の奥底(潜在意識)を探ってみたが、全くのブラック・ホールであった。

ますます眠れなくなってきた。それで「仮定法」を試みた。

もし、あの時二人で散歩し手でも握っていたら・・・と。接吻の一つでもしたかもしれない。それが原因となって結婚したかもしれない。そうすると東京で就職することになる。家庭を営み定年を迎えたであろう。親の介護もできなかったかもしれない。最も大事なことは、インドに行けなかった。

(なんてつまらない人生なんだ!)

(手を握らなくてよかったね)

そこで、ルリ子ちゃんの影像が消えた。

さて、この現象的な意識を若きインド哲学研究者は、どのように解析するであろうか。

彼は『ヨーガ根本経典』を専門とし、特に「潜在的傾向」(ヴァーサナー)の論文を書き上げている。

人の心奥には、いろいろなものが沈み蓄積している。ルリ子ちゃんの影像(想念)もその一つである。

そのような蓄積は次の三つによるものである。

1. サンスカーラ(見えなくする力?、潜勢力、潜在的印象)
2. ヴァーサナー(すりこまれたもの、薫習、習気)
3. カルマ(行なうこと、行為)

以下はわが輩の解釈である。

三つのカテゴリーは、経験することによって何かが沈殿していく。沈殿とは、見えなくなることである。

ルリ子ちゃんの手の温もり、試験場での緊張感、艶やかな袴姿、抱きよせた肌の感触、一瞬一瞬の行為が自分でも気付かないうちに沈んでいた。

これがわが輩にとってのサンスカーラである。

ヴァーサナーは、DNAのようなものと言っても過言ではないだろう。

お猿さんが人間に進化していく過程で、生死に関わるものを第一義として累々と積み重なってきたものである。

人はオギャと生まれたときに性格が決まっていると思わないかい。読者諸氏よ。

愚息・韋駄天は愚妻のDNAを受けて涙もろく優しすぎる男だ。ところがどうだ。愚娘シター姫は祖母のDNAを受けたのか、気丈である。それ故に未だに独身である。

これがわが家のヴァーサナーである。

カルマは「行為」のことである。これについては多弁を要しない。良いことをしても悪いことをしても、人が行動すると経験知が沈んでいく。今日のわが輩の人間性を形成しているのは、良くも悪くも殆どがインド体験によるものである。

これがわが輩のカルマである。

仮定法でルリ子ちゃんの影像(想念)は消えたが、どうやら一時的なものようだ。むしろわが輩は逆を望んでいるのかもしれない。

わが輩から消えないで、ルリ子ちゃん!